

住宅建設を通じて共同体を築く自立支援型の非政府組織（NGO）であるハビタット・フォー・ヒューマニティは米国で始まり、今では世界中に活動の輪が広がっています。重要な活動の一つが豊かな国から貧しい国にボランティアを送り、貧しい人たちと一緒に住宅を建てることです。経済効率を重視する純粋な厚生主義でこの活動を分析すると、ボランティアを外国に送るのは費用が高く、貧しい

やさしい こころと**経済学**

第2章 倫理観・価値観と絆 6

慶応義塾大学教授 大垣 昌夫

国にお金を送り現地で大工を雇った方が安くつくので、経済効率の悪い支援活動との評価になってしまいます。

一方、米国のケイシー・ミリガンは、子供と過ごす時間が長いほど子供を思いやる利他性が増すという自ら発表した内生的嗜好モデルを他人への利他性にも応用しました。

ボランティア時間が長いほど他人への利他性が増すというものです。前回の著者らの最適な所得税率の分析を、この発展形モデルの一例として解

釈してみます。純粋な厚生主義では、労働を促進するため所得税率をマインナスに設定することが最適となります。一方、他人への

奉仕活動通じ幸福感

利他性が増すことは社会的に望ましいという徳倫理では、所得税率を高く設定し、ボランティアを促す政策が望ましいとの結論になります。徳倫理の倫理観ではハビタット・フォー・ヒューマニティの活動は、経済効率は悪くても利他性の上昇を通じて共同体を築く面で評価できるのです。

このことは、幸福概念の違いと関係があります。効用（満足度）の幸福概念とは異なり、徳倫理でのエウダイモニア

（充実感）の幸福概念では、ボランティアや寄付で他人のために資源を使うことで他人への利他性が増して共同体の絆の意識が深まると、幸福感が増していくからです。

我々は利己的に自分のためにお金や時間を使うと幸福になると考えがちです。しかし、実際に家族や他の人たちのためにお金や時間を使って絆が深まったとき、予測しなかったような充実感を体験したことはありませんか。